

まえがき

我々の社会が「情報社会」と呼ばれるようになって久しい。しかし、メディア環境はなおも急速に変貌しつつある。我々は情報社会の本質がいまだによく分からないまま渦中で時を過ごしている。2005年9月には、二つの「日本社会情報学会」(JASI とJSIS)が合同大会を開催した。11月には「日本図書館情報学会」と「三田図書館・情報学会」が合同大会を開催した。情報社会に関連する学会の動向にもしばらく目が離せない。

今年6月には「情報メディア学会」が、「情報社会のメソロジー」といテーマで大会を開いた。この言葉は杏林大学医学図書館の児玉閣氏の発案によるものだが、我々が21世紀型情報社会を生きるためのメソロジー(方法論)は、まだまだ模索されなくてはならないのだ。

技術は変貌する。環境も変貌する。ライフスタイルも変貌する。モラル・道徳などの価値観もまた変化を余儀なくされる。これまで通用していた数多くの事柄がどんどん通用しなくなる。

「変化」はいつの時代にもあったにせよ、その変化のスピードが、情報社会においてはきわめて速いのである。我々の時代の評価は、最終的には後世の人々が総括するのであろうが、我々が今やるべき仕事は、現在進行形で「情報社会のメソロジー」の研究に取り組むことである。そうした変化に関する幾つかの、しかし固性的な洞察がこの論集にはまとめられている。

今回 Vol.10 の発刊にあたって、「情報社会試論」ウェブページでの PDF 版公刊が本格化した。過去のものも可能な限りPDF化していく予定である。これまでも論文入手に関する問い合わせが読者から多数寄せられたが、これによって本論集は一層発信力の強いメディアとなるだろう。

すでに Vol.11 にもいくつかの投稿があり、遠からず発刊予定である。今後も引き続き、各方面の方々から多数の投稿論文が寄せられることを期待したい。学術論文としての水準を堅持しつつ、「試論」といタイトルにふさわしい大胆な提言が現れることを期待している。

2005年12月17日

竹之内 禎